

↑崩れ落ちる兵士の現場

ドバ近郊のセロ・ムリアーノ。日本語で15文字。これだけであった。首都マドリードを出発したレンタカー（小型のルノー）は、うなり声を上げながら120キロ以上スピードで国道4号線を南下し続

唯一の手がかりは「コルドバ近郊のセロ・ムリアーノ」。日本語で15文字。これだけであった。

「ロバート・キャパの写真なくしてスペイン市民戦争を語ることは出来ない」と言わゆるやうんである。

ちなみに、世界最高の戦争写真家と最初に形容したのはイギリスのピクチャーポストだった。

車窓からは、突き抜けて

しまいそうな青い空の下、オリーブとひまわりの畑がどこまでも広がっている。

ソフィア・ローレンとマルチエロ・マストロヤンニ主演の映画「ひまわり」のシーンを思い出していたら、助手席に座っていたフロレンティーノ・ロダオ(43)が

セロ・ムリアーノの標識を見て思わずシャッターを切った



人通りもなく静まり返ったセロ・ムリアーノのメインストリート

けた。アンダルシアの古都コルドバまで約400キロドライブだ。

写真の世界では無名だったアンドレ・フリードマン

が「ロバート・キャバ」の名前で世界中に知られるよ

うになるのはスペイン内戦、いわゆるスペイン市民戦争で崩れ落ちる兵士▽

と題する写真を撮ったことがきっかけだった。

丘の斜面を突撃して下ろ

うとした人民戦線政府の民

兵が、フランコ軍から狙撃

されて倒れる瞬間をどうえ

た写真である。撮影場所と

して記されているのがセロ・ムリアーノなのだ。

1936(昭和11)年に

撮られたこの写真は、もと

もとはフランスの雑誌「ヴュ

ュ」に掲載されたコルドバ

戦線シリーズの一巻に過ぎ

なかつた。ところが、約1

年後、アメリカのグラフ雑

誌である「ライフ」に転載

されると大反響を呼び起こ

し、ロバート・キャバの名

は一躍世界中に知れわたる

「スペイン市民戦争」について『講義』するフロレンティーノさん



と日本や中国との関係を描いた「フランコと日本帝国」(仮題)が今春、晶文社から出版される。私の取材に興味を持ち、通訳兼ガイドとして同行してくれたのだ。

さっそく基礎講義が始まつた――35万人以上のスペイン人が殺害されたときの市民戦争(36～39年)は、僅差で総選挙に勝利した左派の人民政府共和国軍に対しても、将軍フランコ率いる反乱軍が起こした軍事クーデターである。

共和国軍側には主にソ連が、反乱軍にはヒトラーのドイツとムソリーニのイタリアが軍事顧問団を派遣。都市が飛行機によって無差別に爆撃され、一般市民が多数殺されるなど第二次世界大戦の“前哨戦”と言える戦争でもあった。

スペイン市民戦争に関して、米国は原則的には中立の立場をとっていたが、キャバの写真が「ライフ」に掲載されると、アメリカの世論は人民政府側に大きく傾いていく。

「ライフ誌へ転載された背景には、極めて強い政治的な意図があつたのです。しかし、その解説は後述するとして、人民戦線側に立て撮られたキャバの写真だけに、フランコが死ぬま

でスペイン国内ではキャバ

没後50年記念写真展
「知られざるキャバの世界」(毎日新聞社など主催) 4月から東京都写真美術館。その後、美術館「えき」K YOTO (JR京都駅ビル内)、福岡アジア美術館(福岡市)など

+

ロバート・キャバ

知られざるその素顔

柏木 純一

◆ 13 ◆

と日本や中国との関係を描いたのですよ」

「写真を見るこは出来なかつたのですよ」

コルドバの北約10キロに近づいた時、フロレンティーノが地図を見ながら「国道432号線へ右折みたいですね」と言つた。指示通りに曲がると、小高い丘が重なりあのように続く山道に入った。

“いろは坂”を上ること約30分。ついにセロ・ムリアーノに到着した。標識によると、標高645メートル。眼下には今通つて来たアルコレアの町が箱庭のようにかわいらしく見える。

私とフロレンティーノは、崩れ落ちる兵士▽の撮影現場を探し出し、早く取材をしたい思いで胸をときめかせていた。ところが、通りはもちろん村のどこにも人影がないのだ。

アンダルシアの強い日差しの下、セロ・ムリアーノは眠つたように静まり返っていた。それはまるで時間が静止しているかのように感じられた。――敬称略

+ 敬称略